

児童期における学校生活不安と親友観との関係

横浜市立大岡小学校

山本 紗矢香

教育学研究科

堀井 俊章

問 題

学齢期にあたる児童生徒は、1日のうち半分以上の時間を学校の仲間と一緒に過ごす。それは、とすると家族と一緒にいる時間よりも長く、人間関係を形成する上で非常に大切な時間となる。そのような中、現在の日本の学校教育現場では様々な課題がある。

その主な課題として、いじめや不登校が挙げられる。「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省, 2016)によれば、小学校では、平成27年度のいじめの認知件数や不登校児童数はともに、前年度よりも大きく増加しており、その増加率は中学校よりも高い。

その原因として、小学校の学校生活における不安(以下、学校生活不安)の増大が考えられる。「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省, 2016)によれば、小学生の不登校の原因のうち、本人に係る要因について最も多く見られたのは「不安」の傾向があるであった。また、その中でも「いじめを除く友人関係をめぐる問題」に対する不安が最も多く、次に「学業の不振」に対する不安が続いた。

学校現場で問題となっているいじめについて、北川・小塩・股村・佐々木・東郷(2013)は、「いじめは被害側だけでなく加害側の児童生徒でも、不安、抑うつ、社会不適応、そして自殺問題に関連するということが多くの先行研究で明らかにされている」と指摘している。このように学校で起こる諸問題には不安が関係していることが考えられる。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(中央教育審議会, 2008)では、「学習や将来の生活に対して無気力であったり不安を感じたりしている子どもが増加するとともに、友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど、人間関係の形成が困難かつ不得手になっている」との指摘がなされている。すなわち、児童生徒は学校生活において

様々な不安を感じており、そのことが人間関係の形成にも影響を与えていると考えられる。

このような状況の中、Sullivan(1953a, 1953b)は、児童期の10歳前後にあたる「前青年期」における、友人との水入らずの関係である親友関係(chumship)について精神医学の立場から論じている。Sullivan(1953a, 1953b)によると、児童期から青年期への移行期にあたる前青年期は、孤独感や不安感が大きく、表面化しやすい時期である。そしてこの不安や恐怖は持続し、自分以外の人間と親密になりたいという欲求が現れる。すなわち、不安感情があると心理的安定を求め、親友を欲するのであり、親友関係は不安の影響を受けると考えられている。

また、たとえば友人との関係について不安を抱くことで、友人関係について考える契機となり、友人関係のあり方や友人に対する見方・価値観が変容する可能性がある。松永(2011)は「学校場面での友人関係は、社会化経験の基礎となるとともに、自己の確立にとっても大きな影響力をもつ。この意味で、児童理解に基づく生徒指導を考えた場合、子どもたちが友人関係をどのように捉えているかを知ることは、非常に重要であろう」と述べている。これを踏まえると、児童の親友に対する見方や考え方や、すなわち親友観を把握することも重要である。

これまでの児童期青年期の友人関係研究を展望した武蔵(2016)は「友人関係研究は青年期の様相をとらえたものが多く、児童期の様相を捉えた研究が少ない」という問題点を指摘している。松永(2017)は「児童期の子どもたちが、「友だち」という存在をどのように捉えているかについての研究は見当たらない」と先行研究上の課題を指摘した上で、「友だち」という存在の認識について研究し、その発達的な変化を明らかにしている。しかし従来、児童期の学校生活不安と親友観の関係について実証的に検討した研究はほとんど見られない。

以上のように、現代における児童の学校生活不安と親友観に焦点を当て、両者の関係を実証的に検討することは、学校場面における児童の心理を理解するために意義があると考えられる。

本研究においてこのような検討を進めるにあたり、性差という問題を考慮する必要がある。須藤(2010)は、女子の方が男子よりも同性友人との間で密着した関係を築く傾向があることを報告している。また、男子にとって chumship の体験は、主体性、自律性をもった自分を実感することと関連するのに対し、女子ではそのような、自分は他者と分立した存在である、という感覚とは関連しないことも報告している。

また、斎藤・菊池(1990)によると、小学校中学年は、友人と協力して活動を行うことができるようになるため、親密な友人関係が形成されると指摘している。その上で、この時期には友人関係における男子と女子の差が明らかとなり、女子は男子に比べ、友人に自分のことを多く話すようになり、友人と一緒にいようとする傾向が強くなることを指摘している。

また、不安については、児童において女子が男子よりも特性不安が高いことが報告されている(内田・藤森, 2007)。

以上のような、友人関係や不安の性差に関する指摘を踏まえると、児童の学校生活不安と親友観との関係についても、性差の視点を導入することが重要であることがわかる。

目 的

本研究は児童の学校生活不安は親友観に影響を与えるという仮説に基づき、児童の学校生活不安と親友観との関係について実証的に検討することを目的とする。

予備調査

目的

児童の親友観を表す項目を収集・整理し、児童用親友観予備尺度を構成する。

方法

調査協力者および調査時期

首都圏の公立 A 小学校の 4 年生 87 名(男子 44 名、女子 43 名)、5 年生 98 名(男子 52 名、女子 46 名)、6 年生 99 名(男子 52 名、女子 47 名)の合計 284 名

を対象に、2016 年 7 月 15 日～20 日に実施した。

なお、須藤(2010)は親友関係が形成される前青年期は小学校中学年～中学校前半頃に該当すると述べ、また Sullivan(1953a, 1953b)は、前青年期を 8 歳半～12 歳頃と規定している。そのため、児童期の 4～6 年生が調査対象として適すると判断した。

手続き

調査協力者の了承を得た A 小学校に質問紙を持参し、学級を担任する各教員に質問紙調査実施を依頼した。調査の趣旨および倫理的な配慮に関して文書と口頭で十分に説明し、合意を得た児童を調査対象とした。調査は、集団・無記名式であり、実施時間は 5～10 分であった。

質問紙の構成

①フェイスシート

学年と性別について記入を求めた。

②「親友」への考えについて

「親友」とはどのような友達だと思うかについて、自由記述方式で回答を求めた。

③「親友」と普通の「友達」との違いについて

「親友」と普通の「友達」を比べて違うと思うところについて、自由記述方式で回答を求めた。その際、回答欄を 3 つ設け、複数思いつく場合は 3 つまで回答するよう教示した。

なお、「親友」という言葉は小学 3 年生から使用され(松永, 2017)、小学 4～6 年生が日常的に使用する言葉でもあるため、「親友」という言葉を別の言葉(例:「親しい友人」)に言い換えるのではなくそのまま使用した。

結果と考察

予備調査の質問③から得られた、児童の親友観を表す自由記述データの内容を分析するために、KJ 法(川喜田, 1967)を援用し、カテゴリー分類を行った。すなわち、自由記述データを十分に読み込んだ上で一文ごとに切片化し、各切片(項目)について 5 名の評定者(心理学を専攻する大学生 3 名、大学院生 1 名、大学教授 1 名)で類似する内容を集約しながらカテゴリー分類を行った。その結果、5 個の大カテゴリーと 14 個の小カテゴリーが得られた(表 1 参照)。

表1 児童における親友観のカテゴリー分類の結果

大カテゴリー	小カテゴリー	項目例
内面共有関係	内面開示	自分の本当の気持ちを話すことができる 自分のなやみごとを相談することができる
	秘密開示	自分のひみつを打ち明けることができる 家族やほかの友だちには言わないことも言うことができる
	相互援助	協力し合う 助け合う
	信頼	たよりになる 信頼できる
功利的関係	自己中心	元気がないとき、はげましてくれる 悲しいとき、なぐさめてくれる
	話し相手	何でも話を聞いてくれる ひみつや約束を守ってくれる
抽象的特別関係	特別	一生の友だちだと思える 大切だと思える
	親密	ほかの友だちよりも一番仲が良い とても仲が良い
	愉快	いっしょにいと楽しい いっしょにいとおもしろい
内面的類似関係	類似	意見が合う 気が合う
	味方	いつでも自分の味方でいてくれる どんなときも裏切らない
	平和	けんかをしない けんかをしても、すぐ仲直りできる
固定交遊関係	交遊	休み時間や放課後に、いつもいっしょにあそぶ 学校が休みの日もあそぶ
	特有行動	いっしょにおでかけする 親友とだけのとくべつなことをする

第1の大カテゴリーは「内面共有関係」である。親友とは、信頼をベースに自己の感情や秘密などの内面を開示し、相互に共有し支えあう関係性を表している。この大カテゴリーは、「自分の本当の気持ちを話すことができる」などの「内面開示」、「自分のひみつを打ち明けることができる」などの「秘密開示」、「協力し合う」などの「相互援助」、「たよりになる」などの「信頼」といった4個の小カテゴリーから構成された。

第2の大カテゴリーは「功利的関係」である。親友とは、自分の幸福や利益につながることを相手から一方的にでもらうような関係性を表す。この大カテゴリーは、「元気がないとき、はげましてくれる」などの「自己中心」、「何でも話を聞いてくれる」などの「話し相手」の2個の小カテゴリーから構成された。

第3の大カテゴリーは「抽象的特別関係」である。親友とは、最も親しく、かけがえのない特別な存在であり、ともに過ごすことの楽しさを感じるような関係性を

表している。この大カテゴリーは、「一生の友だちだと思える」などの「特別」、「ほかの友だちよりも一番仲が良い」などの「親密」、「いっしょにいと楽しい」などの「愉快」の3個の小カテゴリーから構成された。

第4の大カテゴリーは「内面的類似関係」である。親友とは、互いに意見や考えなどが類似し、自分の味方であって平和的な関係性を表している。この大カテゴリーは、「意見が合う」などの「類似」、「いつでも自分の味方でいてくれる」などの「味方」、「けんかをしない」などの「平和」の3個の小カテゴリーから構成された。

第5の大カテゴリーは「固定交遊関係」である。親友とは、固定された相手と交遊し、他の友達とは異なり、その相手と特有な行動をとるような関係性を表している。この大カテゴリーは、「休み時間や放課後に、いつもいっしょにあそぶ」などの「交遊」、「いっしょにおでかけする」などの「特有行動」の2個の小カテゴリーから構成された。

なお、質問②から得られた児童の親友観項目についてもカテゴリー分類を行ったが、質問②と質問③から得られたカテゴリーは内容が類似していた。そこで、親友と親友ではない友達との差が表れた親友観尺度を作成するために、質問③のカテゴリー分類の結果を採用した。

全項目に対して心理学を専攻する大学生5名、大学院生2名、大学教授1名でワーディング処理を実施し、内容的妥当性を検討した。その結果、「内面共有関係」8項目、「功利的関係」7項目、「抽象的特別関係」10項目、「内面的類似関係」8項目、「固定交遊関係」8項目の計41項目を抽出し、児童用親友観予備尺度を構成した。

本調査

目的

児童の親友観を測定する尺度と学校生活不安を測定する尺度について、因子構造と信頼性を検討した上で、児童の学校生活不安と親友観との関係について実証的に検討することを目的とする。

方法

調査協力者および調査期間

予備調査と同じ首都圏の公立A小学校の4年生85名(男子43名、女子42名)、5年生100名(男子54名、女子46名)、6年生102名(男子53名、女子49名)

の合計 287 名を対象に、2016 年 11 月 29 日～12 月 5 日に実施した。

手続き

調査協力の了承を得た A 小学校に質問紙を持参し、学級を担任する各教員に質問紙調査実施を依頼した。調査の趣旨と倫理的な配慮に関して文書と口頭で十分に説明し、合意を得た児童を調査対象とした。調査は集団・無記名式であり、実施時間は 5 分～15 分であった。

質問紙の構成

①フェイスシート

学年と性別について記入を求めた。

②児童用親友観予備尺度

予備調査で作成した児童用親友観予備尺度を使用し、児童の親友への見方や考え方について尋ねた。教示文は、「あなたにとって、親友とはどのようなそんざいだと思いますか。次のこうもくでは、実際の親友がどのようなそんざいであるかにかかわらず、あなたが想像する親友のイメージについて、あてはまるものを○でかこんでください」とした。各項目に対する回答は、「いいえ」「どちらかといえばいいえ」「どちらかといえばはい」「はい」の 4 件法で求めた。得点が高いほど、各項目で表される親友観をもつ程度が高いことを意味する。

③学校生活不安感情測定尺度（橋詰，2005）

この尺度は学校生活における不登校の要因を探るために作成されたものである。不登校児童に限らず、一般の児童の学校生活の中での不安感情を測定することができるため、本研究において使用した。

この尺度は以下の 5 つの下位尺度（全 30 項目）から構成されている。

「友人抑圧」尺度は、友人からの抑圧的な言動による不安を表す（項目例「友だちに悪口を言われたとき」）。

「成績抑圧」尺度は、勉強がわからないことによる成績悪化に対する不安を表す（項目例「授業がわからないとき」）。

「教師本位」尺度は、教師の自己中心的な態度や言動を受けたときに生じる不安を表す（項目例「先生が自分かってなとき」）。

「学業圧迫」尺度は、学業からの圧迫感を表す（項目例「きらいな勉強をするとき」）。

「自責感」尺度は、自分の責任を感じる感覚を表す（項

目例「リレーなどで自分のせいで負けたとき」）。

各項目に対する回答は、「まったく不安でない」「あまり不安でない」「少し不安だ」「とても不安だ」の 4 件法で求めた。得点が高いほど、学校生活不安が高いことを意味する。

結果

児童用親友観予備尺度の因子構造と信頼性

児童用親友観予備尺度の因子構造を検討するために、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。すなわち、因子数の抽出基準を固有値 1.0 以上とし、因子の解釈可能性を考慮した結果、4 因子が抽出された。一つの因子にのみ負荷量が .40 以上となるよう項目の取捨選択及び回転を繰り返した結果、表 2 のような因子パターンが得られた。因子間相関は中程度であった。

表 2 児童用親友観予備尺度の因子分析の結果

	因子			
	I	II	III	IV
功利的内面共有関係				
11. 自分の本当の気持ちを話すことができる	.77	-.05	-.02	.07
17. 元気がないとき、はげましてくれる	.75	-.01	-.07	-.10
41. 悲しいとき、なぐさめてくれる	.69	.10	.00	-.09
5. 自分のひみつを打ち明けることができる	.67	-.12	-.02	.13
23. 自分のなやみごとを相談することができる	.65	.07	-.09	.16
18. 家族やほかの友だちには言わないことも言うことができる	.62	-.12	.04	.18
10. ひみつや約束を守ってくれる	.54	.03	.28	-.18
9. 助け合う	.50	.18	.07	-.13
40. 何でも話を聞いてくれる	.48	.13	.31	-.01
4. 協力し合う	.44	.24	-.17	.06
抽象的特別関係				
34. いっしょにいると楽しい	.06	.83	-.03	-.09
38. いっしょにいるとおもしろい	-.01	.77	-.05	-.01
2. とても仲が良い	.24	.62	-.17	-.05
30.ほかの友だちよりも一番仲が良い	-.08	.59	.01	.20
26. 大切だと思える	-.08	.57	.22	.11
内面的類似関係				
16. けんかをしない	.00	-.19	.69	-.10
29. 気が合う	-.09	.23	.67	.02
7. 意見が合う	-.07	-.07	.63	.10
31. けんかしても、すぐ仲直りする	-.02	.19	.56	.03
25. いつでも自分の味方でいてくれる	.22	.00	.49	.05
固定交遊関係				
32. 学校が休みの日もあそぶ	-.04	.14	-.21	.79
22. いっしょにおでかけをする	.16	-.11	.04	.60
8. 休み時間や放課後、いつもいっしょにあそぶ	-.06	.09	.08	.51
20. 親友とだけのとくべつなことをする	.04	-.11	.27	.50
因子間相関				
	I	—	.60	.61
	II		—	.55
	III			—
	IV			—

第1因子は、「自分の本当の気持ちを話することができる(.77)」「元気がないとき、はげましてくれる(.75)」など、親友は、自己開示し内面を共有する存在と見ており、しかも、自己に対して功利的に働くような関係性を表すため、「功利的内面共有関係」因子と命名した。

第2因子は、「いっしょにいと楽しい(.83)」「いっしょにいとおもしろい(.77)」など、親友は、一緒にいるときの感覚的な楽しさをもたらす、その親友を特別に大切な存在と見ていることから、「抽象的特別関係」因子と命名した。

第3因子は、「けんかをしない(.69)」「気が合う(.67)」など、親友は、自分と内面が似ていることや、内面が似ているために平和的な関係を築く、あるいは保つ存在と見ていることから、「内面的類似関係」因子と命名した。

第4因子は、「学校が休みの日もあそぶ(.79)」「いっしょにおでかけする(.60)」など、親友は、固定された関係の中で、いつもともに交遊するような関係性を表すため、「固定交遊関係」因子と命名した。

各因子の負荷量.40以上の項目のまとまりを下位尺度とし、4下位尺度(全24項目)から成る尺度を児童用親友観尺度と命名した。各下位尺度のCronbachの α 係数を算出した結果、「功利的内面共有関係」が.88、「抽象的特別関係」が.80、「内面的類似関係」が.75、「固定交遊関係」が.72であった。この結果から、児童用親友観尺度は十分な内的整合性を備え、心理尺度として一定水準以上の信頼性をもつことが確認された。

学校生活不安感情測定尺度の因子構造と信頼性

学校生活不安感情測定尺度30項目が橋詰(2005)と同じ5因子構造であるかを確認するために、Amos(Ver.20)を用いた確認的因子分析を行った。その結果、適合度指標はGFI=.88、AGFI=.81、CFI=.94、RMSEA=.06であり、許容範囲内であった。この結果から、各下位尺度項目をそのまま採用し、Cronbachの α 係数を算出した結果、「友人抑圧」が.95、「成績抑圧」が.87、「教師本位」が.75、「学業圧迫」が.74、「自責感」が.65であり、尺度の信頼性(内的整合性)が確認された。

学校生活不安感情測定尺度と児童用親友観尺度の性差

学校生活不安感情測定尺度と児童用親友観尺度について性差の検討を行うために、各下位尺度得点を用いて t 検定を行った(表3参照)。

表3 学校生活不安感情測定尺度と児童用親友観尺度の性差

	男子		女子		t
	M	SD	M	SD	
学校生活不安感情測定尺度					
友人抑圧	2.63	0.84	2.92	0.78	-3.00 **
成績抑圧	2.47	0.84	2.72	0.72	-2.70 **
教師本位	2.61	0.93	2.80	0.96	-1.64
学業圧迫	2.34	0.85	2.58	0.82	-2.39 *
自責感	2.99	0.94	3.32	0.81	-3.13 **
児童用親友観尺度					
功利的内面共有関係	3.37	0.59	3.66	0.44	-4.58 ***
抽象的特別関係	3.80	0.40	3.89	0.21	-2.34 *
内面的類似関係	3.25	0.65	3.36	0.54	-1.57
固定交遊関係	2.99	0.77	3.16	0.75	-1.86

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

その結果、学校生活不安感情測定尺度では、「友人抑圧」は女子の得点が男子より有意に高く($t = -3.00$, $p < .01$)、「成績抑圧」は女子の得点が男子より有意に高く($t = -2.70$, $p < .01$)、「学業圧迫」は女子の得点が男子より有意に高く($t = -2.39$, $p < .05$)、「自責感」は女子の得点が男子より有意に高いことが示された($t = -3.13$, $p < .01$)。

また、児童用親友観尺度では、「功利的内面共有関係」は女子の得点が男子より有意に高く($t = -4.58$, $p < .001$)、「抽象的特別関係」は女子の得点が男子より有意に高かった($t = -2.34$, $p < .05$)。

学校生活不安感情測定尺度と児童用親友観尺度の相関

学校生活不安感情測定尺度と児童用親友観尺度の相関を検討するために、男女別に尺度間の相関分析を行った(表4参照)。

表4 学校生活不安感情測定尺度と児童用親友観尺度の相関分析の結果

学校生活不安感情測定尺度	児童用親友観尺度			
	功利的内面共有関係	抽象的特別関係	内面的類似関係	固定交遊関係
男子				
友人抑圧	.18 *	.22 **	.16 *	.04
成績抑圧	.22 **	.19 *	.11	.10
教師本位	.18 *	.11	.12	.08
学業圧迫	.04	.11	.09	.10
自責感	.22 **	.30 ***	.18 *	.20 *
女子				
友人抑圧	.25 **	.24 **	.27 **	.12
成績抑圧	.18 *	.16	.22 **	.16
教師本位	.21 *	.09	.13	.14
学業圧迫	.11	.18 *	.04	.12
自責感	.17	.13	.20 *	.09

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

男子において、学校生活不安感情測定尺度の「友人抑圧」は、児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」と有意な正の相関 ($r = .18, p < .05$) を示し、「抽象的特別関係」と有意な正の相関 ($r = .22, p < .01$) を示し、「内面的類似関係」と有意な正の相関 ($r = .16, p < .05$) を示した。

学校生活不安感情測定尺度の「成績抑圧」は、児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」と有意な正の相関 ($r = .22, p < .01$) を示し、「抽象的特別関係」と有意な正の相関 ($r = .19, p < .05$) を示した。

学校生活不安感情測定尺度の「教師本位」は、児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」と有意な正の相関 ($r = .18, p < .05$) を示した。

学校生活不安感情測定尺度の「自責感」は、児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」と有意な正の相関 ($r = .22, p < .01$) を示し、「抽象的特別関係」と有意な正の相関 ($r = .30, p < .001$) を示し、「内面的類似関係」と有意な正の相関 ($r = .18, p < .05$) を示し、「固定交遊関係」と有意な正の相関 ($r = .20, p < .05$) を示した。

女子において、学校生活不安感情測定尺度の「友人抑圧」は、児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」と有意な正の相関 ($r = .25, p < .01$) を示し、「抽象的特別関係」と有意な正の相関 ($r = .24, p < .01$) を示し、「内面的類似関係」と有意な正の相関 ($r = .27, p < .01$) を示した。

学校生活不安感情測定尺度の「成績抑圧」は、児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」と有意な正の相関 ($r = .18, p < .05$) を示し、「内面的類似関係」と有意な正の相関 ($r = .22, p < .01$) を示した。

学校生活不安感情測定尺度の「教師本位」は、児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」と有意な正の相関 ($r = .21, p < .05$) を示した。

学校生活不安感情測定尺度の「学業圧迫」は、児童用親友観尺度の「抽象的特別関係」と有意な正の相関 ($r = .18, p < .05$) を示した。

学校生活不安感情測定尺度の「自責感」は、児童用親友観尺度の「内面的類似関係」と有意な正の相関 ($r = .20, p < .05$) を示した。

上記の有意な相関はいずれも低い相関であった。

学校生活不安感情測定尺度と児童用親友観尺度の重回帰分析

学校生活不安感情測定尺度の各下位尺度を独立変数、児童用親友観尺度の各下位尺度を従属変数とした重回帰分析(強制投入法)を男女別に行った(表5参照)。なお、

多重共線性の問題がないことは確認されている。

表5 学校生活不安感情測定尺度と児童用親友観尺度の重回帰分析の結果

学校生活不安感情測定尺度	児童用親友観尺度			
	功利的内面共有関係	抽象的特別関係	内面的類似関係	固定交遊関係
	β	β	β	β
男子				
友人抑圧	.01	.12	.11	-.11
成績抑圧	.19	-.03	-.09	-.03
教師本位	.13	-.02	.04	.03
学業圧迫	-.23*	-.08	-.01	.03
自責感	.15	.30***	.17	.26*
R^2	.09*	.10*	.04	.05
女子				
友人抑圧	.20†	.22†	.25*	.04
成績抑圧	.08	.01	.20	.14
教師本位	.14	-.06	.04	.09
学業圧迫	-.09	.10	-.22†	-.01
自責感	-.02	-.02	-.01	-.06
R^2	.08	.06	.11*	.03

† $p < .10$, * $p < .05$, *** $p < .001$

男子では、学校生活不安感情測定尺度の「学業圧迫」から児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」への標準偏回帰係数は有意な負の値であった ($\beta = -.23, p < .05$)。

学校生活不安感情測定尺度の「自責感」から児童用親友観尺度の「抽象的特別関係」への標準偏回帰係数は有意な正の値であり ($\beta = .30, p < .01$)、同じく「自責感」から児童用親友観尺度の「固定交遊関係」への標準偏回帰係数は有意な正の値であった ($\beta = .26, p < .05$)。

女子では、学校生活不安感情測定尺度の「友人抑圧」から「功利的内面共有関係」への標準偏回帰係数は有意傾向の正の値であり ($\beta = .20, p < .10$)、同じく「友人抑圧」から「抽象的特別関係」への標準偏回帰係数は有意傾向の正の値であり ($\beta = .22, p < .10$)、同じく「友人抑圧」から「内面的類似関係」への標準偏回帰係数は有意な正の値であった ($\beta = .25, p < .05$)。

学校生活不安感情測定尺度の「学業圧迫」から児童用親友観尺度の「内面的類似関係」への標準偏回帰係数は有意傾向の負の値であった ($\beta = -.22, p < .10$)。

考察

児童における親友観の構造

児童用親友観尺度は、因子分析の結果、「功利的内面共有関係」「抽象的特別関係」「内面的類似関係」「固定

交遊関係」の4因子から成ることが明らかになった。

児童用親友観尺度の作成にあたり、予備調査では「親友」と普通の「友達」を比べて違うと思うところ」を自由記述方式で回答を求めた。すなわち、普通の友達に対するイメージ（友達観）とは異なる親友観として記述された内容をもとに、親友観を表す項目を作成し尺度化した。したがって、児童用親友観尺度の4因子は普通の友達との違いが反映された内容となっていると考えられる。

また、因子分析の結果と、予備調査における自由記述データによるカテゴリ分類の結果との関係性を検討すると、因子分析では、自由記述データの大カテゴリである「内面共有関係」と「功利的関係」が合成されて、「功利的内面共有関係」因子が抽出された。すなわち、「功利的内面共有関係」因子には、大カテゴリの「内面共有関係」と「功利的関係」が反映された内容となっている。他の3個の大カテゴリである「抽象的特別関係」「内面的類似関係」「固定交遊関係」は、因子分析において、それぞれ同様の内容の因子として抽出された。14個の小カテゴリについては、それぞれ対応する各因子に概ね含まれていることが確認された。

したがって、児童における親友観の構造について、一定の妥当性は保証されていると考えられる。

児童の学校生活不安の性差

性別によって学校生活不安感情測定尺度の得点に差が生じているかを検討した結果、「友人抑圧」「成績抑圧」「学業圧迫」「自責感」において、女子は男子よりも得点が有意に高いという結果が得られた。すなわち、「教師本位」を除き、学校生活不安は総じて女子が男子よりも高いことが示された。

この結果について、尺度を開発した橋詰(2005)は性差のデータを発表していないが、学校生活不安と密接にかかわる特性不安は女子が男子よりも高いという報告(内田・藤森, 2007)と符合する。

児童の親友観の性差

性別によって児童用親友観尺度の得点に差が生じているかを検討した結果、「功利的内面共有関係」と「抽象的特別関係」において、女子は男子よりも得点が有意に高いことが明らかになった。すなわち、女子は男子よりも親友という存在を、内面を共有したり、一緒にいるときの楽しさを感じたりする特別な存在として見る傾向にある。

斎藤・菊池(1990)によると、女子は男子よりも友人に自分のことを多く話し、友人と一緒にいようとする傾向が強いとされている。また、須藤(2010)は、女子の方が男子よりも同性友人との間で密着した関係を築く傾向があることを指摘している。また、須藤(2010)によると、男子にとってchumshipの体験は、主体性、自律性をもった自分を実感することと関連するのに対し、女子ではそのような、自分は他者と分立した存在である、という感覚とは関連しない。このような女子の友人に対する密着した依存的な心性が「功利的内面共有関係」と「抽象的特別関係」という親友観の高まりに影響を与えている可能性がある。

児童の学校生活不安と親友観の関係

児童の学校生活不安と親友観の関係について、男子では、重回帰分析の結果、学校生活不安感情測定尺度の「自責感」が児童用親友観尺度の「抽象的特別関係」や「固定交遊関係」に対して有意な正の関係を示した。これらの関係は相関分析においても有意であった。しかし、それぞれの関係について女子では重回帰分析においても相関分析においても有意ではなかった。これらのことから、男子は、女子と異なり、学校生活不安における「自責感」を感じるほど、「抽象的特別関係」や「固定交遊関係」という親友観をもつ傾向が示唆される。

一方、女子においては、重回帰分析の結果、学校生活不安感情測定尺度の「友人抑圧」が児童用親友観尺度の「功利的内面共有関係」「抽象的特別関係」「内面的類似関係」と有意または有意傾向の正の関係を示した。相関分析においてもいずれも有意であった。これらの関係について男子において相関分析では有意であったが、重回帰分析では有意ではなかった。これらの点を踏まえると、女子は、男子と異なり、学校生活不安における「友人抑圧」を感じるほど、「功利的内面共有関係」「抽象的特別関係」「内面的類似関係」といった親友観をもつ傾向が示唆される。

このように学校生活不安と親友観の関係には性差が認められた。すなわち、男子においては、自分の責任を感じる者ほど、親友という存在を、一緒にいるときの楽しさを感じたり、いつも一緒に交遊したりする存在として見る傾向にあり、一方、女子においては、友人からの抑圧的な言動に不安を感じる者ほど、親友という存在を、内面が似ていて、その内面を共有したり、一緒にいると

きの楽しさを感じたりするような存在として見る傾向にあることが示唆される。

男子においては主体性や自律性と chumship の体験は関連をもつ(須藤, 2010)。「自責感」という自己の責任を感じるという感覚は他者依存的ではない主体性や自律性に通じるものであり、男子は他者と独立した自己感覚を基盤として親友観が形成される可能性がある。

一方、女子において、「友人抑圧」という不安の高まりが、「功利的内面共有関係」「抽象的特別関係」「内面的類似関係」といった親友観と関連を示した。すなわち、女子の場合は、友人とのかかわりの中で生じる不安を基盤として親友観が形成される可能性がある。

なお、男子においては、重回帰分析の結果、学校生活不安感情測定尺度の「学業圧迫」が児童用親友観尺度の「功利的面共有関係」に有意な負の関係を示したが、両者の相関係数は有意ではなかった。また、女子では、重回帰分析の結果、学校生活不安感情測定尺度の「学業圧迫」が児童用親友観尺度の「内面的類似関係」と有意傾向の負の関係を示したが、両者の相関係数は有意ではなかった。そのため、これらの結果についての解釈には慎重さを要する。

まとめと今後の課題

本研究は、児童の学校生活不安と親友観との関係について実証的に検討することを目的とした。その目的を遂行するために、新たに児童用親友観尺度を作成した上で、男女別に学校生活不安と親友観との関連を分析した。その結果、児童の学校生活不安は親友観と関係を示すことが明らかとなり、その関係性について男女別の特徴を見出すことができた。このように児童心理の理解につながる知見が得られたことは本研究の一定の成果である。

しかし、本研究には以下のような課題が残されている。

第1に、本研究では学校生活不安が親友観と関係を示すことは明らかになったが、親友観をもつことが実際の現実場面での親友関係や親友づくりにどのような影響を与えるのかという問題までは解明できていない。今後は親友観だけでなく、実際の親友関係も把握し、学校生活不安との関係について解明する必要がある。

第2に、Sullivan(1953a, 1953b)によると、不安を軽減するために自分以外の人間と親密になりたいという欲求が現れる。本研究では、親友観に着目したが、今後は不安の高まりによってどのような親友を欲するのか、と

いった欲求に着目した研究も求められる。

第3に、本研究では、児童の学校生活不安と親友観との関係性には性差が見られた。しかし、性差だけでなく、学年差、学校差、地域差、家庭環境、パーソナリティなど多様な要因が関与している可能性もある。学校生活不安が親友観、親友関係及び欲求に与える要因について、多様な観点から研究する必要がある。

第4に、児童用親友観尺度は全体的に得点が高く、標準偏差も小さい傾向にあった。児童用親友観尺度と学校生活不安感情測定尺度の相関が全体的に低い傾向にあることも、標準偏差が小さいことに起因している可能性がある。今後は個人差をより反映できるツールの開発が可能か検討する必要がある。

引用文献

- 中央教育審議会 (2008). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf (2016年10月27日)
- 橋詰 篤 (2005). 小学生の学校生活不安感情についての研究 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 47, 260.
- 川喜田 二郎 (1967). 発想法——創造性開発のために—— 中公新書
- 北川 裕子・小塩 靖崇・股村 美里・佐々木 司・東郷 史治 (2013). 学校におけるいじめ対策教育——フィンランドのKiVaに注目して—— 不安障害研究, 5, 31-38.
- 松永 あけみ (2011). 児童期における友人関係理解の発達の变化——小学1年生から3年生の縦断的作文の分析を通して—— 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 60, 215-221.
- 松永 あけみ (2017). 児童期における「友だち」という存在の認識の発達の变化——小学校1年生から6年生までの6年間の作文の分析を通して—— 明治学院大学心理学紀要, 27, 49-60.
- 文部科学省 (2009). 学校における教育相談の充実について Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/066/gaiyou/attach/1369814.htm (2016年10月27日)
- 文部科学省 (2016). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/1378692.htm (2016年10月27日)

武蔵 由佳 (2016). 児童期青年期の友人関係研究の展望
——個人要因、環境要因、集団的友人関係の視点から—— 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊 24-1, 25-35.

斎藤 耕二・菊池 章夫 (1990). 社会化の心理学ハンドブック——人間形成と社会と文化—— 川島書店

須藤 春佳 (2010). 前青年期の親友関係「チャムシップ」に関する心理臨床学的研究 風間書房

Sullivan, H. S. (1953a). *Conceptions of modern*

psychiatry. New York : Norton. (サリバンの, H. S. 中井久夫・山口 隆 (訳) (1976). 現代精神医学の概念 みすず書房)

Sullivan, H. S. (1953b). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York : Norton. (サリバンの, H. S. 中井久夫 (他訳) (1990). 精神医学は対人関係論である みすず書房)

内田 利広・藤森 崇志 (2007). 家族関係と児童の抑うつ・不安感に関する研究 ——子どもの認知する家族関係—— 京都教育大学紀要, 110, 93-110.